

茂原市史編さん

事業の活動 (民俗調査その二)

No.5

民俗学は、その地域の人々の暮らしを後世に伝える学問です。平たく申しますと、人々はどうな食事、どんな衣類、どんな住まいだったのか、さらに歌や伝承や遊びなども含んで記録を残します。

『茂原市史』の民俗について調査をする手始めとして、茂原市に長く暮らしてきた方々よりお話を伺う「聞き取り」をいたしました。

コロナ禍の状況でしたが、万全を期し、茂原の中心街にあたる本町から調査を始めました。令和2年8月から翌年12月まで4回実施しました。

安川時計店の安川和子氏、茂原市役所元職員豊田雅資氏、星野薬舗の星野初枝氏、大和屋旅館の足立俊夫氏の皆さんからは、貴重なお話をいただきました。

私個人としても伯父齊藤首が、茂原警察署長(昭和10年〜11年)として浜町に住んでいた事もあり、戦前戦中の町

の暮らしに関心がありました。その一部を紹介いたします。本町通りの安川時計店で生まれ育った安川和子さんのお話です。昭和2年生まれの今年満95歳。朝日の森保育所、茂原尋常高等小学校、静和高等女学校、短期教員養成所を経て国民学校初等科訓導として野田市の小学校に奉職(昭和18年)。戦後の昭和20年、茂原小学校に赴任。昭和22年、結婚を機に退職し、家業の時計店を継ぎ現在に至っています。以下安川さんの言葉を借ります。

「祖父は宮大工として藻原寺の鐘撞き堂などを手掛けました。父は小学校高等科を終えた後、奉公に出され、東京の時計職人に弟子入りをしてその職を身に付けた後、茂原で時計店を開業しました。夫は銀座の服部精工舎(セイコー)で時計職人として働き、戦後婿養子として家に入りました。」

「父の代の明治36年、茂原で最初の時計屋として開業しました。ドイツ製の珍しい時計(注)現在茂原市立郷土資料館で保管)なども扱っていま

した。古い時計が倉庫に少し残っていたのですが、昨年の水害で廃棄せざるを得ませんでした。」

「安川の家は昔から今の場所にあります。この通りは門前町として栄えていて、いくつもの商店が並んでいます。本町の商店の多くは、農業はせずに商業だけで生計を立てていました。六斎市が立った日は、結構な人出がありました。駅の近くには繭市場(現イオン跡地)があつて、農家にとっては現金収入の貴重な機会でした。繭を出荷した後、本町の居酒屋で一杯飲んでから帰る感じでした。茂原小学校に面した浜町の通りには茂原農学校があり、下井戸(現八千代)は田畑でした。本町の六斎市は終戦まで立って、農産物をはじめ古着屋などもあり本場に賑やかでした。」

た。毎日早く起きました。店も早く開けました。学校に行く前に掃除の手伝いをし、帰宅しては子守をして家の手伝いをしました。そういう生活の中で3月にはお雛様市、5月には苗市(杉苗など)、12月には羽子板市などもあつて、見て歩くのがとても楽しかったです。」

「私たちが女学校に入学したのが、県立になった年です。その頃は戦争が始まっていますので軍事教練がありました。美術館の近くに壕があり、実弾射撃も行いました。射撃に使う銃は、長生中学(現長生高校)から借り、リヤカーで運びました。また、茂原公園内のスイルンの咲いている池で「国民皆兵」と称して泳がされました。池から上がると体中に池の藻がまとわりついてしまい、落とすのが大変だった思いがあります。他にも竹槍訓練や千人針を縫った記憶があります。慰問袋も作りました。戦地から兵隊さんの手紙も届いた

のですが、先生が男女関係に発展することを懸念して酒盛塚の近くに穴を掘り、全部焼却してしまいました。そういう時代だったのです。本当に戦争だけはだめですね。その遊びが、ゲーム等で敵をやっつけたたり爆撃したりしたものが多く、心配しています。」

聞き取り調査は、奥が深いです。
茂原市史編さん委員会
委員 齊藤 功
問合せ
美術館・郷土資料館
☎(26)21331 FAX(26)2132

「父の代の明治36年、茂原で最初の時計屋として開業しました。ドイツ製の珍しい時計(注)現在茂原市立郷土資料館で保管)なども扱っていま

した。古い時計が倉庫に少し残っていたのですが、昨年の水害で廃棄せざるを得ませんでした。」

た。毎日早く起きました。店も早く開けました。学校に行く前に掃除の手伝いをし、帰宅しては子守をして家の手伝いをしました。そういう生活の中で3月にはお雛様市、5月には苗市(杉苗など)、12月には羽子板市などもあつて、見て歩くのがとても楽しかったです。」

聞き取り調査は、奥が深いです。
茂原市史編さん委員会
委員 齊藤 功
問合せ
美術館・郷土資料館
☎(26)21331 FAX(26)2132



▲本町安川時計店付近 (昭和4年鳥瞰図)